

第 17 回東川賞審査講評

海外作家賞	アンドリュース グランツ氏 (Andrejs GRANTS)
国内作家賞	細江英公氏 (ほそえ・えいこう)
新人作家賞	オノデラユキ氏 (おのでら・ゆき)
特別作家賞	飛弾野数右衛門氏 (ひだの・かずうえもん)

21 世紀に入って最初の年の東川賞選考委員会は、例年の通り去る三月の末に東京の渋谷で開かれ、次のような選考理由をふまえて各賞、各受賞者が決定した。思い起こせば 1985 年、東川町が「写真の町」を宣言し、第一回の国際写真フェスティバル「フォトフェスタ」が船出をしたころには、今日のようなインターネット網もなければ、世界情勢も東西冷戦が継続していた、そんな時代でありました。しかし、その時代にすでに特色ある映像表現と、我が国の伝統的な美学を背景にしながらも、現代的な表現手法で世界中に名が知れ渡り、抜群の評価を受けていた日本人写真家が、細江英公氏である。細江氏の代表作「おとこと女」(1961 年) や「薔薇刑」(ばらけい・1963 年)「鎌鼬」(かまいたち・1969 年) などは、写真界のみならず、当時の我が国芸術界にことごとく大きな衝撃を与えた。細江氏はまた同時代の写真家たちと結成した集団「VIVO」に於いても重要な役割を担い、また自らの作品のみならず、同時代の外国作品の日本への紹介や、写真美術館設立促進事業への取り組み、大学教育における教師としての勤めなど、おおよそ他の人物には不可能な多面的な活動を続けられてきた。近年は清里フォトアートミュージアムの館長を務める多忙な身ではあるが、2000 年には秘蔵の作品群「ルナ・ロッサ」(新潮社刊) を出版し、また、近作をも含む大回顧展を、山形美術館を皮切りに、全国で開催という精力的な活動を続けている。我われ選考委員会は、氏の業績を久しく尊意をもって受け止めてきたが、この大回顧展と「ルナ・ロッサ」の出版の機をとらえて、本年度、細江英公氏に東川賞国内作家賞を贈ることにした次第である。つぎに海外作家賞であるが、前述のように東川賞制定の時代には、未だソ連邦が存在し、その頃は連邦内の小さな共和国であったバルト三国を今年度の海外作家賞の対象地域とした。ラトビア、リトアニア、エストニアというそれら三国は、1990 年前後に相次いでソ連邦から独立し、その自決の運動それ自体が、連邦の崩壊と冷戦の終結を促したことは、我々の記憶にまだ新しい。今日、名実共に独立国であり、我が国とも正式の外交関係にあるこれら三国へ、二月下旬の約二週間、審査委員会から平木収が出張し、現地での調査に当たった。ことに東川町とは親善関係にあるラトビアのリガでは、同地の写真美術館館長のヴィリニス・アウジンス氏が親切にも情報提供をしていただいた。調査はラトビア、エストニア、リトアニアの順で円滑に進み、それぞれの国で数多くの写真家資料を入手することができた。それらを材料に審査を行い、別掲のようにアンドリュース・グランツ氏に本年度の東川賞海外作家賞を決定した。グランツ氏は 1955 年ラトビア生まれで、ソ連邦からの独立を挟んで、時代と社会がどのように変化を遂げたかを記録するドキュメンタリストであると同時に、そこに生きる人々の心模様やその変化を描き上げるヒューマニティ豊かなアーティストでもある。ことにラトビア現代美術の動向とも深くかかわっている。ヨーロッパ諸国においても氏への注目度は高く、またどこか懐かしいグランツ氏の写真映像はあわただしく時代の変遷をくぐり抜けてきた我われ日本人にも、きわめて親しみ深い作品であり、その日本公開は我らの喜びとするところである。

新人作家賞には、パリを拠点に制作を続け日本と世界各国で活発な作品発表を続けているオノデラユキ氏に決定した。オノデラさんは、1991年に設けられ今日も若手写真家の登竜門として親しまれている「写真新世紀」展でその頭角を現し始め、その後制作の場をパリに移してから、作風はより自由に、そしてその完成度を一挙に高め、「古着のポートレート」などの注目作品を矢継ぎ早に発表した。近作の「真珠のつくり方」や「窓の外を見よ」では、写真の原点である光学や銀粒子に思いをはせ、視覚と精神を既成の感覚から解放してくれるユニークかつ大胆な写真表現を見せ、しなやかに新しい写真の次元の扉を開いた。今後の展開がますます楽しみな写真を手段とするアーティストである。また、北海道に関係深い写真家に贈られる特別賞は、東川町生まれで、久しく東川の歴史を半世紀以上にわたって写し続けてこられた飛弾野数右衛門氏に贈呈する。飛弾野氏は別掲の略歴に示すように、永年町役場で公務にいそしんできたアマチュア写真家だが、その写真撮影の情熱と技量は、プロ、アマを問う必要のない密度の高いもので、町を、そしてそこに共に生きる隣人を、また時代の変化や地域の特質を、あますところなく捉えている。写真というメディアの真骨頂ともいえる飛弾野氏の写真群は、東川町の誇りであり、町民全てにとって財産であり、我が国現代史の文化財でもある。この偉業を忘れること無きよう、我われは飛弾野数右衛門氏に特別賞を贈るものである。今年度も例年にも増して水準の高い各賞が決定したことを報告するとともに、バルト諸国の調査に協力してくださったアウジンス氏を始めとする関係各位には記して謝意を表したい。

東川賞審査会幹事委員 平木 収

第17回東川賞《海外作家賞》"The Overseas Photographer Award"



アンドリュース グランツ (Andrejs GRANTS)

リガ市 (ラトヴィア) 在住 1969年10月18日

1955年3月7日 リガ市 (ラトヴィア) 生まれ

1961-1973 ラトヴィアのマドナにて初等、中等教育を修了

1973-1978 ラトヴィア国立大学 (リガ) で学ぶ

1978-1991 人民写真スタジオ『オウガー』(オウガー/ラトヴィア) のメンバー

1979~ 『青少年創作活動ハウス』(リガ) で写真術を教える

同時にフリーランスの写真家

第17回東川賞《国内作家賞》 "The Domestic Photographer Award"



細江 英公

東京都新宿区在住

1933年3月18日山形県米沢市生まれ。幼年期より東京で育つ。

1954年東京写真短期大学（現東京工芸大学）技術科卒業。

1956年第一回個展「東京のアメリカ娘」を小西六フォトギャラリー（東京）にて開催。

1960年第二回個展「おとこと女」を小西六フォトギャラリー（東京）にて開催。

以後、国内および海外で、個展、グループ展多数。

2000年から2003年まで、回顧展「細江英公の写真1950?2000」が、山形美術館より国内および海外の美術館を巡回。現在、東京工芸大学芸術学部教授、清里フォトアートミュージアム館長。

第 17 回東川賞《新人作家賞》 "The New Photographer Award"



オノデラユキ

フランス・パリ市在住 1962 年 10 月 25 日東京生まれ。

1991 年第 1 回「写真新世紀」受賞／日本

1996 年第 21 回「写真批評家賞 KODAK」審査員特別賞受賞／フランス

第17回東川賞《特別作家賞》"The Special Award"



飛弾野 数右衛門
北海道東川町在住

1914年（大正3年）3月27日東川生まれ

1928年（昭和3年）庁立永山農業学校（現・旭川農業高等学校）入学

1931年（昭和6年）同校卒業

1931年（昭和6年）東川村役場に勤め始める

1975年（昭和50年）東川町役場退職

東川町役場では建設課長20年、収入役3期12年を勤める。

1975年（昭和50年）?1983年（昭和58年）東川町選挙管理委員会委員長

1975年（昭和50年）?1979年（昭和54年）東川町町立リリー保育所所長

1980年（昭和55年）?現在（株）ひだの塗装工業会長

軍歴

1935年（昭和10年）?1936年（昭和11年）歩兵第28連隊現役

1938年（昭和13年）?1939年（昭和14年）北部第4部隊召集（中支派遣）

1944年（昭和19年）?1945年（昭和20年）歩兵第100連隊召集（鹿児島終戦）

勲7等陸軍歩兵曹長

写歴

1928年（昭和3年）8月乾板カメラで写真を撮る。町内での個展3回。

東川町カメラクラブ顧問。

所蔵カメラ310台余。

1934年（昭和9年）?1963年（昭和38年）16ミリ映画を撮影。現在は東川町で保存。